私の見たインドネシアの幼稚園と子どもたち

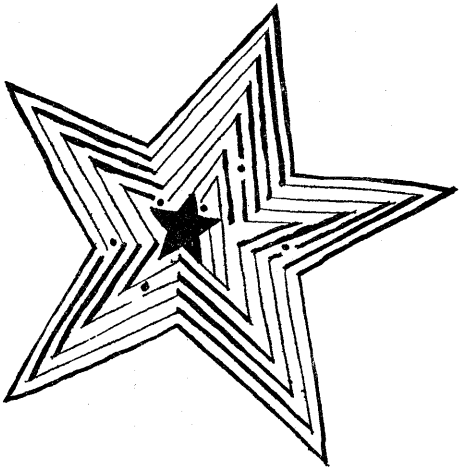
（前編）

近藤伊津子

これはインドネシアのカトリック教会の附属幼稚園にほんのしばらくの間、入園させてもらった時のことである。

昨夏のこと、インドネシアの首都ジャカルタから東方にある大学都市バンドンで過ごした折に、知人の中国人系のインドネシア人の紹介で実現できた。バンドン市の街の中心近く、やや東側の大通りジェンデェラル・アハマット・ヤニ通り（アハマット・ヤニ将軍通り）No.265に在る幼稚園である。

聖・十字架・セント・アウグスチヌス附属幼稚園。幼



稚園の他に小学校と中学校も附属していた。

朝七時十分から九時三十分までが五歳児クラス、二十五名。九時三十分から十二時までが四歳児クラス二十名、計四十五名の小じんまりとした園である。カトリック教徒の子どもだけでなく、いろんな宗教の子ども、そして親の階層、学歴も様々であるときいた。親は博士、学卒、運転手、学校の教師、中国人系などなど。月謝は最高が一二、〇〇〇ルピア、一〇、〇〇〇ルピア、八、〇〇〇ルピア、六、〇〇〇ルピア、一、二五〇ルピアとこれまた様々であるときいた。この附属の教師の子は一、五〇〇ルピアであるという。このように月謝納入の一覧表を見せて説明を受け、これは「入園の時、親と話し合って決める」ということで納得がいった。まさしくイスラム社会の古き習慣である。(四ルピア≒一円)

この四十五名の園児に園長(四十歳位、女性)、助手先生(三十歳位、女性)、さらに補助員(二十五歳位、女性)の三名が常時教室にいる。指導は園長と助手。教材配布、ゴミ拾いなどの介助を補助員がする。園長先生は体格立派な美女で当市の幼稚園協会々長の要職にも就いているとのことであった。

園児たちは赤いチョッキとスカート、または半ズボンに白い半袖シャツ、白ソックスと清潔な身なりである。これはSD(公立小学校)の制服とそっくりである。

建物は通りに面しており、低い木製の白い垣根をおして入ると広い前庭に入り、その奥が教室となる。教室は六〇平方メートルもあろうか、四五人がけの丸または角のテーブルと椅子が、ほどよく納まっている。最後部には園長の立派なデスク。奥の壁には飾り棚があり、この国特有のミニチュアの台所用品が、飾られていた。その欄の下には遊具がていねいにしまい込まれていた。ブリキ製のおままごとなど。入口に近いところのガラス窓の下の戸欄には、一部本棚になっており三色刷りの薄い絵本が六〜七冊置かれていた。指人形など遊具が納っていた。教室の奥の扉を開けると中庭があり、小学生の校庭のようであった。その扉の右手に手洗用の水道蛇口が一

つあり、その奥にトイレが一つ。運動場に面した一室は物置きを兼ねた台所で、月一回、園児の母達が来て、昼食を作り、園児たちと一緒に食事をするという。いずれも小ざっぱりとしていた。トイレは水洗であるがこの国特有の使用法で、右手の手おけで水を汲み、左手で洗いながら流すので、どこのトイレも足元が水びたしになっているが、ここも例外でなかった。

インドネシアの朝は早い。従って園の始まりも早いのである。子どもたちは三三五五と、自家用車で、徒歩で、親やメイドにつれられて来る。前庭に整列、園長先生と助手先生が園児の頭髪、耳の後、歯、手、爪、靴下などの点検をして室内に入る。席に着いて朝の挨拶、私にも「パギー、ブー」という。私は「パギー、アナアナ」と返す。パンチャシラ（建国五原則――憲法）の歌をテープで聴かせ、それからキリスト教のお祈りを唱える。教室の真正面には、パンチャシラのシンボルの絵と国首の肖像の写真があり、後の壁に十字架があった。

それから三〇分、自由に好きな遊びをする。

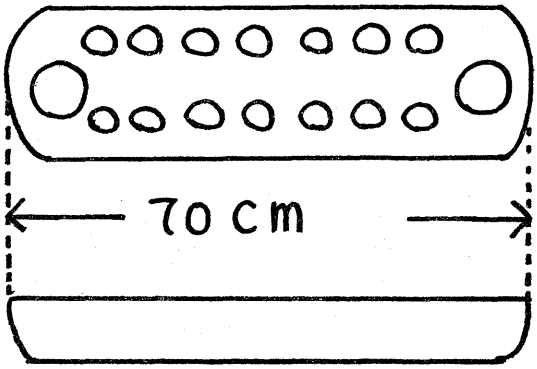
おままごと、ござを敷いて、みんなお母さん役、私ひとりお客さまになった。葉っぱを刻む、お釜に入れ下からうちわであおぐ。蒸器に入れる、ふたを取ってうちわであおいだりする。ごちそうが出来上る前にこの遊びの時間はいつも終ってしまう。ブリキ製で、この国の台所用品がほとんどそろっているのである。

バケツに水を入れ、前庭に持って行き、たくさんの小さなコップ（プラスチック製）で水を汲み、それを長く並べる子。人形の赤ん坊をベッドに一生懸命に寝かせる子、人の形、動物の形のジグソーパズルに熱中の子。じゃんけんをしている子。母指は象、人指しゆびは人、小指はアリを表わす、この三つのいずれかを出すのである。人は蟻に勝ち、蟻は象に勝つ、象は人に勝つのである。残念ながら掛声を忘れてしまった。

〝ダコン〟というゲームは六〇センチメートルほどの長さのカヌー形の木製で、中に大小十六のくぼみがあり、そこに宝貝をあるルールに従って入れては一部出した

り、また入れたりする。ルールが難しく園児たちはルールおかまいなしに遊んでいた。私も園長先生に習ったが、なかなかむずかしく、帰国してから憶えた。このゲーム板は、一般家庭や園のはラワン材の質素なものであったが、高級家具店や骨董、店では黒檀、チーク材で彫刻の施されたものがあった。粒の揃った宝貝も美しく、掌からすべり出るようにくぼみに入れられていくのを見るとその仕草は魔術のように見える。

前庭ではシーソー、追っかけっこ、さまざまである。



ままごと以外は男女の差はない。

やがて先生の笛の合図で遊具を片付け席に着く。

折紙、あひるを黒板に貼り、女児にブルーの色紙を配り、丁寧な説明。懸命に折る。出来上ったあひるをノートに貼る。私にも、といわれ、持参の千代紙を配りだまし、ぶねを一緒に折り、大きな千代紙で、つるを何羽も折って飛ばして遊んだ。

やがて、そこで手を洗い（厳重に先生が注意する）持参の弁当を開く。その前にお祈り。

小さな水筒にはどの子も甘味のジュース、プラスチックの弁当箱には菓子パン一ヶがほとんどである。中には焼き飯、白い飯の上に肉などを載せたもの、クレープ（母親の手製という）。紙ナプキンを一枚ずつ配られ口元を拭かせた。私には菓子パンと甘い紅茶を出してくれた。賑やかである。席を立ち歩く子もあるが……。終ってカバンにしまい、帰り仕度。園長先生と私に握手して「スラマット、ティンガル！」と言い前庭に出て行く。私は「スラマット、ジャラン」と返す。迎えに来ている

父母らに渡し、次の五歳児が教室に入る。

五歳児もカリキュラムは同じであるが、手遊びとか工作はかなりうまく、たとえば色紙を鉄筆の先で押えちぎり糊で貼りつけ絵に仕上げていく。精巧な出来上りである。その他、何色から色糊を画上紙の上で指、掌でぬりつけ、好きな絵を描く。また、絵の具をたっぷりの水で溶き、筆にふくませ、何となく何かが描かれていく。思いがけない出来上りに歓声を挙げる。この子どもたちの発想にまかせた指導にはいささかびっくりした。滞在中私の娘を一緒に、と連れていってもらっている画塾では、まさに模写に徹しており、娘はうんざりしていた。この国では、未だ子どものイメージを重視した絵の指導はあまり盛んではない、とも聞いていたからである。

早朝から（宿舎を出るのが六時三十分、朝食は六時少し前）一時ごろまでの園生活で少し体調をくずし胃痛が絶えまなく続いていたが、この絵の時間は楽しくそれさえ忘れていたということを今でも憶えている。

さて、ある日、園長先生は会議があるということで、四、五歳合同保育（七：〇〇AM～九：三〇）となった。その日は定期的な週一度の散歩をすることになった。園児は揃いの白い半袖と緑のすじの入ったパンツ、白い帽子で登園して来た。前庭に整列して出発。助手先生がタンバリンを打ち歩調を合わせようとする。周辺の住宅街を十五～二十分歩いて、奥行きのある大きな門扉の前に来た。じゃらんじゃらんと大きなドラが鳴り門が開いた。同教会の養老院慰問である。門の中に入ると草花が美しく、歩道の左右に連棟の、または別個の家屋が連り、道に向けて窓もドアも開け放ってあり、老人は椅子に、ベッドに座っている。園児たちは一人一人の老人に、声を張りあげて「シアン・ブー」と何度もくり返す。こだまするように聴えた。一番奥に病室があった。かなり広く三十ベッドほど、ゆったりと置かれ、重症の老人が横たわっていた。婦長の案内で、病気の説明もしていただいたが、癌の末期患者もいるという。写真を撮ってもよいといわれたが、病室の老人たちにはカメラをむけられなかった。

また、愛らしい声で別れの挨拶をして、じゃらんじゃらんと門を鳴らして帰路に。

清潔で明るく、花の色彩が、老人に似つかわしくないほどであった。ここも、有料、無料さまざまの負担であるという。富める者は出し、貧しい者は富める者から恵みを受けるのは当然のこと、という哲学であろうか。

帰園し食後、帰宅。

この日は、私を迎えに来た車で園長先生も会議のある場所まで同乗の車の中で、園長と家庭の話し。中学・小学生の息子がいる、夫婦とも働いているが、メイドは子どもの教育上、良くないというより悪い、親の言うことを聞かなくなる、わがままになる、そういう理由でメイドを雇っていないということだ。朝三時起床、一日のすべてを準備して六時に園に着いている。帰宅すると夕食は二人の息子が全部整えてくれているとうれしそうに話してくれた。

中流以上の家庭では一～二人のメイドを使っているのが普通の国であるが、教育上好ましくないという理由を

はっきりときかされたのは初めてであった。なるほど、と思われる。人件費が安い(失業率が高い)ので、上流家庭ではメイドの外にボーイ、運転手、庭園があれば園丁とたくさんの使用人がおり、門扉が音も無く開いたり、お茶が音もなく人の気配すらなく出て来たり、下げられたりする。メイドは裸足が歩くから大理石の床では音がしないのである。こんな環境の子どもは、目の色一つで使用人達が動いて、すべての要求を満たしてくれるわけで、自ら労役することは何もなく育つ五～六歳になっても、食事中、自分では食器にも触れずに、つまりメイドに口の中に食物を入れてもらい、その間、手はぶらんとさげたまま、というのを見たことが何度かあった。

この園でも、母たちの作った焼きめしを一緒にごちそうになった時のこと、自分で食べ（られ）ない園児を二～三人見た。園長、助手先生が、横に座って口に入れてやらねばならなかった。腕はおろしたままであった。ついでであるが、この国での食事の作法は皿の上にごはんをよそい、副食のものを上にかけ、右手の母指、人さし指、中指で、混ぜあわせ、口に運ぶ。指先で味わいながらの食事でもある。家庭ではほとんどこうして食事をするのであるから、スプーンはまことに苦手のようであった。この日は、食事前に食事の作法、スプーンの使い方の説明があった。口に直角に入れてはいけない、横にしなさい、口の音をたててはいけないなどと。指で食べることからスプーンを推めているのは、手洗いの徹底と合わせて、衛生思想向上のためと見た。清潔であれば指で食べることの方がはるかにおいしいだろうと見ていても感じた。そしてこの国の文化であるのだから。

（つづく）

（かっこう文庫主宰）